

## 平成25年度第2回千葉県博物館協議会会議 議事録要旨

日 時：平成25年12月4日(水) 13:30～15:30

会 場：千葉県立中央博物館 会議室

出席者：委 員 ー 反町委員 鵜澤委員 水島委員 米本委員 西田委員 岡本委員  
小野議長 常光委員  
博物館 ー 中里美術館長 堀田中央博物館長 鈴木現代産業科学館長  
太田関宿城博物館長 関口房総のむら館長  
文化財課ー 萩原学芸振興室長

### 【会議次第】

#### (1) 協議事項

「県民が学べる場としての博物館の新たな役割と新たな手法について」総合討論

#### (2) 報告事項

博物館評価について

#### (3) その他

### 【議事概要】

- 1 開 会 事務局による説明
- 2 館長あいさつ 関宿城博物館長によるあいさつ
- 3 議 事

#### (1) 協議事項

議長：「県民が学べる場としての博物館の新たな役割と新たな手法について」を事務局より説明してください。

事務局：(説明)

議長：総合討論ですので、幅広い御意見で御議論を頂きたい。

委員 A：専門が生物系なので中央博物館との関わりが強かったが、他の美術館・博物館でも地道な努力を続けて入館者数なども維持していることがわかった。報告にあった3つの主要議題のうち、環境の問題など時代に則したテーマをどのように取り入れていくかが重要である。また、手法ということでは広報の技術などもそれに当たるが、いずれにしても館が長い間に蓄積した基本的な博物館のあり方を一つ一つ確認しながら見直しをしていくことが大切である。

委員 B：博物館の設置目的にそぐわないものは除外するという趣旨はどのようなところにあったのか。

委員 A：資料を整理するという意味にとられたかもしれない。もちろん資料ごとの評価をきちんと行い、整理することも必要だと思う。ただ、前回の会議では連携事業の問題で、連携先を安易に選ばず精査してから連携する趣旨だったと記憶している。

議長：事務局には、報告書での言い回しに注意するようお願いしたい。

委員 C：社会教育で大切なことは育てること、育成することである。育成することはエネルギーを要するが、次代につながると考えられる。移動美術館を行った美術館では

地元の反応などはどうだったのか。

美術館長：高齢の方々から、普段なかなか美術館にも行けないが、近くで開催されてよかったとのご意見を頂いた。アンケート結果でも、是非継続してほしいと好評である。

一方、施設のスペースの問題などで展示内容が限られてしまうなどの問題があった。

委員 C：外に出ていくということは大きなPRになる。地元の理解が得られて良い。確かに高齢化すれば館に直接出かけることが少なくなる。また、インターネットの普及で閲覧のみで済ませてしまうケースが想定されるので、講演会やイベントなど、強力に人を呼ぶ工夫も必要だと思う。

美術館長：ご指摘のとおり、東金会場では、移動美術館の開催と同時期に著名な音楽家のコンサートがあったため、移動美術館への入館数も伸びたようだ。

議長：ヨーロッパでは、博物館での音楽会などは定着している。

委員 D：中央博物館での「ふぐの産卵にかかる生態」の発見はテレビのニュースで見て大変うれしく思った。研究組織を持たなければできないことであるし、学術的にも寄与するところが大きい。館の広報の点から見ても良かった。協議のまとめについては前向きですばらしいと思うが、限られた人員や予算を鑑みれば、事業の精選化・重点化を議論の中でも行わなければ、虻蜂とらずになる可能性がある。

議長：一般的には、「選択と集中」を如何に工夫していくかと言うことだろう。

中央博物館長：当館では存在感とブランド力を高めるため、効果的な情報発信・研究成果や地域・団体連携による展示などを行い、今まであまり館を知らなかった人に対して周知を地道に行うことが大切と考えており、例えば県立図書館との連携事業では単なる講師派遣でなくお互いの特徴を生かした展示を行うなどしている。

関宿城博物館長：関宿城博物館は県の北西端の野田市に所在しているが、同じ東葛地域の野田市郷土博物館、流山市立博物館と産業・文化・自然など3館共同テーマによる展覧会を実施してきている。来年度も蒸気船「通運丸」を共同テーマにして継続していく予定である。

委員 E：各館努力をしていることがよくわかった。情報の発信という点では、やはり教育現場に対し、学校の生活・総合の授業に生かせるプログラムや体験・キャリア教育などをわかりやすく紹介してもらえれば、教育現場でも是非取り入れていきたいと考える。

現代産業科学館長：館の活動を小・中学校、高等学校の現場へ伝えるのは、案外難しいもので、教育事務所のボックス配布だけでなく、学校に出向いて内容の話をしたうえでチラシ配布をお願いしてくるような工夫をしている。また、理科教員の研究大会などでブースを設けてPRを行っている。しかし来館する多くの児童はもともと近所のリピーターの児童や遠方から団体で来館する児童が中心であり、近隣の市町へのPRはあまり成果があがっておらず広報成果のドーナツ化現象のような状況が見られる。当館では、キャリア教育として3～5人、1日から3日程度の職場体験の受け入れが盛んである。担当する学芸員に負担はあるが、教材作りの体験を通し、「授業を受ける側からはわからなかった、受けさせる側の苦労を知った。」などという感想が寄せられるなど生涯学習の場は提供できていると考える。一方、団体で大量に来館していただいた時の、いわゆる巡回プログラムが手薄なので、開発の検討をしているところ

である。

委員 B：教育現場には館のプログラムを受け入れる余裕はあるのか。そこを見ていかないと学校への発信がスローガンに終わる可能性がある。

中央博物館長：当館では、学校に対して、博物館を利用した授業のプログラムを開発して、提示を行っている。大多喜城分館では所在地の大多喜町教育委員会や学校に働きかけを行い、昨年度7校7件だった連携授業を11校14件に伸ばすなどの実績をあげている。また、大和分館では出張授業のニーズが高く、柏市などまで出かけている。子供の頃の博物館体験は、継続的なリピーターとなるという期待がある。

委員 F：大学生が地元の博物館に行ったことがないような事例が発生している。東京国立博物館の企画展などは、電車の中吊り広告を見て、若い人たちも出かけるだろうが、地元の博物館は魅力的な館のあり方などを見直す必要がある。移動美術館なども好評であったが、施設のスペースの問題で良い資料を展示できないのであれば宝の持ち腐れの感は否めない。なぜ安房博ではなく文化ホールだったのか。安房博の方が展示施設としての制約は少なかったはず。なぜその施設かという点でも企画を検討し、人が来たいと思える展示をする必要があるのではないか。その意味では指定管理の房総のむらは努力をしている。各館とも房総のむらの良い点を吸収して欲しい。

房総のむら館長：指定管理者として特別なことをしているわけではないが、指定管理の特性を生かして、やれることを地道におこなっている。学校向けには、利用のための研修を教員向けに実施している。年間来館する700団体の半数が学校団体で、30,000人ほどは小学生である。各種の催し物は好評で、新年も1月2日から「むらのお正月」を実施する。

議長：広報という立場からご意見をいただきたい。

委員 G：NHKは放送博物館とスタジオパークについて、どうしたら来館者が増えるか考えている。移動美術館と同じで、年に数回地方の放送局を会場に移動博物館をやっており、地方の人たちに喜ばれている。東京に行かなくても、あるいはせっかく東京にでかけたのにわざわざ放送博物館に出向くこともないものだが、地元で放送機材やドラマに使用した衣装が見られるのが好評である。各館とも外に出て、存在の周知をすることが大切なのではないだろうか。財政的な問題はあるが、NHKでは無料開放日を設けており、その日には入場者が増えている。中央博物館においても入場者数が増え、入場料収入が減少する現象が見受けられるが、これも無料開放日等を設けた結果か。

また、各館はマスコミをもっと利用するべきだが、それはたとえば記者クラブに資料を投げ込むということだけでなく、普段から記者とのつながりを作るとともに、記者が読みたくなるような資料の工夫が大切と思う。マスコミに記事が掲載される利点は「お金がかからない」、「第三者の目で文章を書いてもらう」ということにつきる。良い物をみんなに伝えることは重要な仕事であって、広報の予算は大切で、まっ先に削減されるのは本末転倒である。

中央博物館長：当館で昨年度比の上半期入場者数が増加し、入場料が減少しているのは、昨年度と企画展の時期がずれているためで、今回の報告には10月からの企画展の内容が反映されていない。入場者数については、「さわやかちば県民プラザ」で夏に無

料で実施した「水郷を旅した人々」の入場者を館の入場者としてカウントしたことによる。

また、広報面では、県政記者クラブなどを活用して積極的に広報活動を展開しており、企画はもとより、資料にも工夫をこらして、記者の目をひくよう努力している。一例として、大和分館では、昨年度から行っている「昭和の名車大集合」という企画展示に、東京オリンピックの公式公用車や金メダリストのメダルなどの展示を行ったところ、当日昼のNHKのテレビ番組でも取り上げてもらったこともあり、大変好評で、1日2000人以上の入館があった。

委員 A：中央博物館の場合は、朝日新聞に定期的に記事が掲載されている。無料開放の日については、北海道大学総合博物館は入館料無料であるが、ドナーション(寄付)の箱は設置しており、これはとてもよいことと思う。PRということでは、地元にあるデパートや銀行などに、展示やPRのコーナーを作る交渉をしてみてもどうか。とかく個別の館の対応だけでは「来てください。行きましょう。」のシステムがかみ合っていない場合が多いので、「行きましょう」の後押しをいかに学校側にしてもらうかの検討が必要である。たとえば小学校6年生になったら県内の各館に一度は必ず行くなど、市町村教育委員会に学校の行事に取り入れてもらう努力をしなければならない。一方、受け入れ側もその事業のためにはボランティアを育成するなど対応すればよい。そういうことを運用してみて、どこがよくてどこがうまくいかないか検討していく必要があるのではないか。

委員 C：学校行事は前年度に決定している。早い対応があれば受け入れることができる

委員 D：国立歴史民俗博物館でも他館の状況を調査している。有名になった旭山動物園では休館日はなく、学芸員6人体制で大変な苦勞をされているが、人々の体験に沿うおもしろい説明などを工夫している。また、入園料でいえば通常800円の料金のところ年間パスポートが1000円ということで、非常なお得感があり、リピーターの確保に貢献していると思われる。

学校との連携では、歴史民俗博物館でも学校との連携を行って、指導案を作ったの授業や修学旅行前に「奈良・京都」という授業を展開している。各館のプログラムが小・中・高等学校のどの授業のどの単元で何時限利用できるのか、「教科書のここで」というように具体的に教員に対してPRする必要があるのではないか。

委員 G：NHK放送博物館のある東京都港区内では、約20の博物館があり、スタンプラリーなどを企画している。たとえば千葉地区と限っても市美術館やきぼーなどの施設もあるので、共同して子供を集める工夫をしてはどうだろうか。なお放送博物館では「OBパワーの活用」として退職したアナウンサーに館内案内役を頼んでおり、一般のボランティアとはひと味違ったプロOBの活用の道にもなっている。

## (2) 報告事項

議長：それでは次に「博物館評価について」に移ります。事務局から説明願います。

事務局：評価については文化財課がとりまとめていますので、文化財課から説明します。

学芸振興室長：(説明)

議長：委員の皆様、質問、ご意見ございますか。

委員 A：先ほどミュージアムショップに立ち寄ったら、いわゆるガチャポン販売機の「日本の亀」の中に外来種のみどりガメのカプセルが入っていたが、そういう細かいところも館としてもきちんとチェックするようにしていただきたい。

議長：広報の点では、博物館は比較的交通の便の悪いところにあり、公共交通機関でのアクセスについて案内をきめ細かくするなど工夫してほしい。なお、自己評価の欄ではホームページへのアクセス数が少ないと自己評価している館もあるが、その件へのご意見はないか。

委員 D：国立歴史民俗博物館でも評価があり、情報発信がテーマとなっている。ホームページで言えば、「詳細だが知りたい情報にたどり着けない。館員の顔が見えてこず、いきいきとしたものが伝わってこない」等の厳しい意見をいただいている。県の博物館評価は、委員は3年単位で行うのか。

学芸振興室長：会議体の取扱いとして、その都度の評価をいただくことで継続して行きたい。評価機能を博物館協議会の中に組み込んでいくのか否かは、今後の検討課題である。

委員 D：協議会に組み込んですべてを行うのは、事務量が膨大になるので、慎重に検討してほしい。

議長：評価値の最低は2.5、最高が4.0というのは非常に厳しい値だ。評価は評価だが、この数字だけが一人歩きしては困るので、表現に工夫するなどしてはどうか。

委員 A：国のレベルでも国立美術館と歴史系博物館を統合していく動向がみられ、反対しているところだが、こういう上部の動きには惑わされないようにしてほしい。教育行政が弱れば、国も弱ることは明らかであると考え、博物館を大切にしていきたいものだ。人を呼びよせるためには、コンサートなどはよいのではないか。すべて文化活動は大切であるとの観点からは、自然史系博物館であっても土曜コンサートをやる例もある。カフェの目玉メニューを工夫したり、たまにはコンサートを楽しみながらワインをたしなむのもいい。若いお母さんを引きつけ、それを子供たちが引き継いでいくようにしたいものだ。

委員 B：学校教育現場との交渉は、各館個別ではうまくいかない。教育委員会での調整を経た上で、個別に交渉していくことが望ましい。県教育委員会会議などでも議題にあげてもらい、整備してもらう必要がある。

議長：大変話題性のあるNHKの大河ドラマ「八重の桜」が放送中だが、千葉県への誘致はどのようなのだろうか。

委員 G：現在全国で20以上の話題があり、千葉でも香取市、館山市、大多喜町など地元で誘致活動があると聞いている。

議長：私事だが、現代産業科学館の設立準備委員から館の協議会委員、展示運営協議会理事、そしてこの博物館協議会と実に30年近く現代産業科学館と関わってきた。その間、何人もの館長が異動でかわった。俗に「人・物・金」と言う。建物はある、金すなわち予算が少なくなる。せめて人たる館長が長く在任し、実力を発揮するシステムにならないかと思ってきた。民間でも商法が変わり、取締役は年長だが執行役員は若く長期にわたり力を発揮できるようになってきている。館長の外部からの登用とまでは望まないが、長期の在任ができるよう、異動のシステムの再考を県教育委

員会にもお願いしたい。

委員 G：旭山動物園は建物も決して新しくない。その中での発想の転換が大事だと思う。

鶴岡市立加茂水族館のように発想を転換し、クラゲで生き返った博物館もある。

委員 A：時代が変わっても博物館が本来やるべきことは踏まえての発想の転換はとても

重要である。ただし、えさに引きずられることはないようにしたい。

議長：それでは議事を終了し、事務局に進行をお返しします。

事務局：(閉会あいさつ・次回案内)